

# 「英語教育改善プラン」に基づいた教員の英語力・指導力向上に向けた取組 「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～千葉県～

## 課題

- ・生徒の英語力向上・・・①自分の考えなどを発信する力(話すこと, 書くこと) ②求められる英語力(中学:CEFR A1, 高校:A2)
- ・教員の指導力・英語力向上・・・①授業における英語使用率 ②授業における言語活動時間の割合  
③求められる英語力(CEFR A2)

## 取組の内容

### ○推進リーダーによる指導力向上研修と外部試験の活用

- ①神田外語大学と連携した指導力向上研修  
(神田外語大学教授等による講義・演習の実施)  
小学校教員131名、中学校教員245名、高校教員325名

### ②外部試験の活用

- 生徒 英検IBAを中・高校とも県全体で実施**  
**教員 英検本試験の助成(133名分)**

### ○CAN-DOリストを活用した授業の実践と評価方法の工夫改善

- ・年間指導計画とCAN-DOリストを関連づけた授業の内容や評価方法等の工夫を行い、学習到達目標達成のための指導実践(PDCAサイクルの活用)

## 成果②

### ◎求められる英語力(資格取得率)

生徒	H25	H26	H27	H28	H29	H30
中学	36.6%	40%	52.5%	45.9%	48.9%	
高校	28.3%	27.2%	45.6%	44.3%	43.9%	
教員	H25	H26	H27	H28	H29	H30
中学	27%	29%	30%	30.3%	31.7%	
高校	33.9%	37.9%	39%	44.6%	47.7%	

## 成果の周知

- ・英語教育拠点校(高校)による小・中教員を招いての授業公開、研究協議会の実施
- ・英語教育推進リーダーの授業公開及び指導案のHP公開

## 成果①

### ◎生徒の英語による言語活動時間の割合の増加

(中学は目標達成, 高校は徐々に増加)

中学	H25	H26	H27	H28	H29	H30
目標	52%	55%	60%	65%	70%	
現状%	52%	58.9%	68%	65.2%	70.4%	
		%		%	%	
高校	H25	H26	H27	H28	H29	H30
目標	32%	35%	40%	45%	50%	
現状%	31.5%	36.1%	38.2%	39.6%	44.4%	
	%	%	%	%	%	

## 課題解決のための手立て

- ①英語教育推進リーダーの授業公開及び研修受講の授業実践の促進
  - ・小学校 伝達講習の工夫
  - ・中学校 4技能を統合した授業実践
  - ・高校 スピーチ、ディベート等の実践促進
- ②CAN-DOリストの活用推進及び小中高の連携
  - ・中学 **CAN-DOリストと年間指導計画を関連付けた授業の実践**
  - ・高校 **英語教育拠点校(高校)による小・中教員を招いての授業公開、研究協議会の実施をはじめとした連携取組の推進**
- ③外部試験受験の促進と受験料補助
- ④3年間実施した英検IBAの結果を基にした課題を踏まえた授業改善の実施

# 平成29～30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～成田市立吾妻小学校～

## 現状の課題と課題解決のための手立て

- ・英語に対して苦手意識のある教員は、T1として授業を進めることに自信がもてない。→授業を通じた実践研修を行う。
- ・児童の表現意欲に個人差がある。特に高学年にその傾向が見られる。→プレゼンテーションや活動の工夫をする。

## 具体の取組の内容

- 年度当初に、授業の進め方やHTとALTの役割についての共通理解を図る研修を行う。
  - ・英語担当教員とALTが行うデモ授業の中で、教員は児童役として参加し、授業の進め方を体感する。
- 校内で英語の授業研究を行い、教員の指導力を高める。
  - ・各学年1学級が授業を行って参観し合う。その後、研究協議を行い、授業の成果と課題を知る。
- 具体的な場面のプレゼンテーションを展開することで、児童がその時間、何を学習するのか理解できるようにする。
- 児童にとって必要感のある活動の設定と楽しみながら習得できる活動の工夫を行う。
- 中学校・高等学校との連携を図る。
  - ・市内の高等学校の授業を参観する。高等学校や中学校の教員と各学校の取組についての意見交換をする。

### 成果①

- 教員の意識調査
  - ・T1としてクラスルームイングリッシュを進んで使い、授業を進めている。  
H29:25%→H30:42%
- 児童の意識調査
  - ・ALTが言っていることがだいたい分かる。  
H29:80%→H30:86%
  - ・英語で自分の気持ちをだいたい言える。  
H29:76%→H30:81%

### 成果②

- ・T1として授業を主導し、積極的にクラスルームイングリッシュを使って、授業を進める教員が増えた。中にはオールイングリッシュで行う教員もいる。
- ・その時間の授業の目的が明確になり、より意欲的に発話する児童が増えた。
- ・HTやALTが言っていることを理解できる児童が増えた。

### 今後の課題・方向性

- ・多くの教員が、T1として自信をもって授業を進められるように、継続して、授業を行う上での共通理解事項の伝達や授業を通じた実践研修を行う。
- ・児童の表現意欲を高めることができるように、一人一人の発話量の確保や必要感のある活動の工夫を行う。
- ・中学校や高校と交流をもち、つながりを意識した活動・支援の在り方を考えていく。

# 平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～千葉県松戸市立南部小学校～

## 現状の課題と課題解決のための手立て

- ・児童の英語活動に対する意欲の向上
- ・教員の指導力向上

## 具体の取組の内容

- ①英語インストラクターとの連携による、教員の指導力向上
- ②英語教育推進リーダーによる、校内研修の充実

## 成果③

- ・ICT教材の活用により、教員の不安解消につながった。  
→だれが指導に当たったとしても、不安なく指導に当たることができる。また、学年、学級毎に内容や進度の足並みを揃えることができた。
- ・英語教育推進リーダー・インストラクターによる校内研修により、
  - アクティビティの充実
  - classroom Englishの積極的活用
  - 基本的な授業展開の周知
  - 「Let's Try」「We Can!」対応のICT教材への対応等、足並みを揃えた教員研修を積み重ねることができた。

## 成果①

- ・モジュールの時間を設定し、その時間に日常的にICT教材を活用する(1日15分、週3回)ことで、児童が英語に触れることを習慣化できた。
- ・今年度、ALTとの授業の他に、新たに英語インストラクターとの授業を増設。外国語活動・外国語化必修に向けた先行実施を行い、教師、児童共に英語の学習習慣が身に付いた。
- ・1学期→インストラクター先導  
2学期→担任主導  
担任が授業を進められるよう計画的に校内体制を整備

## 成果②

- ### 児童の意識調査の結果の推移
- ・「英語活動が楽しい」・・・80%程度
  - ・「英語をもっと学びたい」・・・85%程度
  - 昨年度に比べ、充実感・意欲については共にポイントが上回った。
- ### 聞き取りテストの結果(校内平均)(29年度)
- ・単語の意味理解・・・93%
  - ・アルファベットの読み・・・90%
  - ・基本的な英文の理解・・・91%
  - ・日常会話の理解・・・92%
  - ・ヒント文から答える力・・・75%

## 今後の課題・方向性

- ・ALTと担任との連携面の強化  
→担任、ICT教材、ALT、地域ボランティアのそれぞれがチームとして連携できる年間計画が必要である。
- ・学年間の系統性の検討  
→昨年度の反省を生かし、校内研修を充実。そのことにより、低・中・高学年それぞれに合った題材・活動内容の系統性を模索していく。

# 平成27～30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～成田市立吾妻中学校～

## 現状の課題と課題解決のための手立て

- ・1学年: 家庭での学習習慣が身につけていないため、基礎的な単語のwriting定着に課題がある。
- ・2学年: speakingの活動に慣れてきたが、即興での返答に時間がかかる。
- ・3学年: writingの力は伸びているが、表現の豊かさに課題がある。

## 具体の取組の内容

- コミュニケーション活動への態度の育成
  - ・新文法導入のためのActivity【話すこと・聞くこと・書くこと】
- コミュニケーション能力の向上
  - ・帯活動としてのActivity【話すこと・聞くこと・書くこと】
  - ・授業開始から10分間のQ&A活動
  - ・speechの指導【書くこと・話すこと】
  - ・校外学習・修学旅行を利用したInterview～Presentation【話すこと・聞くこと・書くこと】
  - ・Speaking Testは今年度2回実施 【話すこと】



▲ALTとのQ&Aの様子

### 成果①

中学3年卒業時、英検3級以上  
取得者数及び取得率の推移

実施時期	生徒数	3級以上取得者数	取得率
平成27年度 3年生	56人	17人	30.4%
平成28年度 3年生	87人	33人	37.9%
平成29年度 3年生	83人	34人	40.9%
平成30年度 3年生(11月 現在)	120人	65人	54.2%

### 成果②

1学年: 帯活動でのQ&Aにより、テンポよく自分の答えを言えるようになってきた。  
2学年: 帯活動でのQ&Aにより、話す力が伸びてきた。2回行ったspeakingテストでは、自分からの質問や返答の幅が広がった。(単発で終わらない)  
3学年: 毎時間のwriting練習により、書く力はだいぶ伸びてきた。

### 今後の課題・方向性

- ①英語を使った言語活動の充実
  - ・帯活動としてのActivity(Q&A活動)の継続
  - ・場の設定、経験を積ませる
- ②生徒同士のやりとり(interaction)の向上
  - ・授業において、即興的な会話等
- ③「読むこと」に関する実践的な活動の研究
  - ・教材研究の充実
- ④追跡調査等による効果分析
  - ・Speaking Testにおける生徒の発話語数の変化調査

# 平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～千葉県松戸市立和名ヶ谷中学校～

## 現状の課題と課題解決のための手立て

- ・効率良く学習内容の定着・活用を図るために、効果的な教材作成及びICT機器を活用した授業の実践
- ・各単元の目標を明確にした継続的な指導を行うために、CAN-DOリストを活用した指導・評価の実践

## 具体の取組の内容

### ICT機器の活用

- ・デジタル教科書を使用した画像、映像の提示等
- ・新出文法項目導入、教師の指示、例文等を可視化を意識してパワーポイントで作成
- ・英語科教員内での情報共有、データの共有、蓄積
- ・授業開始時のルーティン(単語(熟語)練習、暗唱練習、歌、会話練習、(英問英答による)Q&A)

### OCAN-DOリストを活用した指導、評価

- ・毎時間のゴールを生徒に提示(学習課題、めあて、学習内容、手順、まとめ)
- ・年間指導計画を基にした学期毎、単元ごとの指導目標の確認(評価基準・評価規準の確認)
- ・PDCAサイクルに基づいた授業改善
- ・授業研究、相互授業参観、協議会、教科部会での授業の改善

## 成果①

### 英検準会場受験者数(合格者数/受験者数)

	H30.6月	H29.6月	H30.10月	H29.10月
準2級	7/15名	未実施 (体育祭前日)	6/18名	1/5名
3級	34/44名		18/33名	20/30名
4級	15/18名		16/24名	11/16名
5級	7/7名		6/6名	10/12名
総数	63/84名	0名	46/81名	42/63名

\* 通常よりも受験料が安く、級が高い生徒の受験者数が増えた。

### 英検IBA団体成績表

(3年生年度別スコア) (3年生年経年変化)

	H30	H29	H28		H30	H29	H28
リーディング	404	389	387	リーディング	404	334	283
リスニング	381	352	330	リスニング	381	295	262
総合	785	741	716	総合	785	629	545

\* ICT機器の活用やクラスルームイングリッシュを意識して使用している影響か、リスニングスコアが顕著に伸びている。

## 成果②

- 表現意欲の向上(教員から見た生徒の変容)
  - ・クラスルームイングリッシュのみの指示でも、
    - ①ICT機器を活用し、教師の指示を明示する事、
    - ②使う表現を変えない(何度も同じ表現を使う)
 事で、生徒は指示通りに活動に移ることができた。
  - ・生徒同士でのペアでの会話練習をすることで、失敗を恐れずに発言する生徒が増えた。また、繰り返し行うことで、定例表現の定着が見られた。

- 指導方法の統一(管理職から見た教員の変容)
  - ・ICT機器を多用する職員に触発され、英語科教員全員がICT機器を使用するようになった。
  - ・ICT機器を使うことの利点を考えて授業計画を立てられていない場面もあるが、今後の授業改善に期待ができる。
  - ・教科部会等で単元ごとの目標や評価規準を話し合うことで、学年内での教科担任による授業計画の差がなくなり、学年同一歩調で指導できている。

## 今後の課題・方向性

### ICT機器の活用

- ・単元、または1時間の授業の内容をppt.で作成することで、教員の行き当たりばったりの授業ではなく、計画された授業内容にすることができた。一方で、データの共有は行っていないもの、ICT作成には時間がかかり、データの蓄積が十分でない、教材を作成する教員の負担が大きい。
- ・何のためにICT機器をその場面で活用しているのかを考えて授業を構成していく必要性があげられる。ICT機器の使用のメリットを考えて授業構成を行わないと、ただ使用するだけで終わってしまう。教科内での授業の方向性(知識の定着・活用の明確)の改善が急務である。

### OCAN-DOリスト

- ・学習指導要領の改定や、英語教育に求められている力が変容していることを踏まえ、校内CAN-DOリストを毎年修正していく必要性を感じた。
- ・会話練習やQ&A等、授業開始時のルーティンは知識の定着の一助となるが、その表現を自己表現として発展させる方法や、評価の方法に明確さをもたせることに課題が残った。

# 平成26～30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～松戸市立松戸高等学校～

## 現状の課題と課題解決のための手立て

- ・生徒の英語力の底上げを図る。英語を実際に使って表現する経験を積み重ね、総合的な英語力を養成する。
- ・生徒主体の授業を行うように、教員の意識改革と授業改善を図る。

## 具体の取組の内容

### ① CAN-DO リストを意識した授業計画

各年度初めに生徒・教員が卒業時の達成目標を共有・意識付けをし、授業でも折に触れて目標を確認。

### ② 授業における自己表現活動の強化

自己表現活動及び、パフォーマンステストの回数を増やし、英語を使うことに焦点をあてる。

### ③ 英検・英検IBAを利用した生徒の英語力の可視化

4技能別の弱点を洗い出し、その対処をしていく。また、生徒の英語学習に対する動機付けの一助とする。

→平成29年度までの実施ではリーディング力に比べてリスニング力が低いことが明らかとなっており、共通のリスニング教材の導入やリスニングテストの定期的実施を進めてきた現状がある

## 成果①

- CAN-DOリストで目標の共通理解を図ったことで、学習の目的をよりはっきりと示すことが出来るようになった。
- 目標達成のために、学年共通の活動・教材を設けることで、生徒の既習事項に差が生じづらくなり、学習の積み重ねがしやすくなった。
- 教員の共通理解が促進され、授業やテストの形態などが見直された⇒より生徒主体の授業に改善された。
- 英語で表現することに対する、生徒の抵抗感の軽減⇒自分の考えや意見を表現できる楽しさ・喜びを見出すことができた。

## 成果②

- 定期テストと同じ頻度でパフォーマンステストも行うようになった。また学校行事などの機会にはエッセイを書かせたり、スピーチさせたりして随時評価した。
- 平成30年度実施の英検IBAでは、全学年リスニングの正答率がリーディングの正答率を上回り、リスニング力について一定の改善が見られた。  
( Test B R:43.6% L:49.3% )
- 英検級判定において、準2級相当以上の実力をもつ生徒数が増加した。

級	5	4	3	準2	2	準1
2017	20	271	573	169	32	0
2018	1	7	568	408	44	1

## 今後の課題・方向性

- ① **生徒の表現力の向上**  
やり取りにおける即興性の向上、表現活動全般におけるaccuracyを意識させる工夫をどう行うか
- ② **表現活動とその評価方法の検討**  
より生徒の実態に則した活動・効果的なパフォーマンステストを継続的に検討
- ③ **教員の授業力向上のための工夫**  
多忙を極める中でどのように研鑽の時間と機会を捻出するか  
→教科内研修を設ける取組を検討中

# 平成26～30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」千葉県立松戸国際高等学校

## 現状の課題と課題解決のための手立て

3年間を通しての、または年次ごとの目的を共有し、松戸国際の英語教育とはどうあるべきかを考えていかなければならない。新学習指導要領を見据えたCan Do Listの改善を通して、目的や指導法の共有とともに、授業の充実を図りたい。

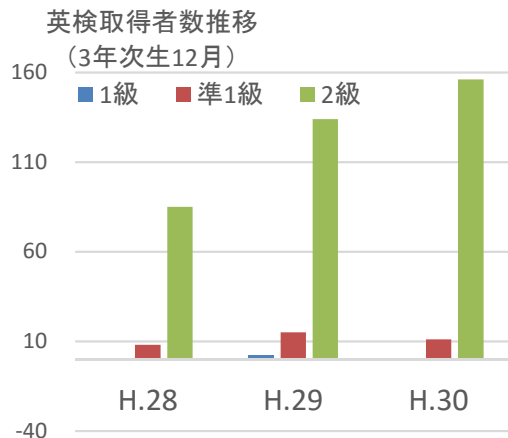
## 具体の取組の内容

Can Do List の改善についての教員同士の話し合い(3月に普通科のCan Do List改訂版作成を目標に)  
同一科目担当者による週に1度のmeetingで情報交換(共通ワークシートの作成 観点別評価を通じた評価の共有)  
アウトプットを主とした活動についての指導法の共有 共通パフォーマンステストの実施  
1, 2年次生全員に取り組みさせた家庭学習についての合意

- ・Journal(英文日記)を2週間に一度提出し、ALTがコメントを記入して返却
- ・Extensive Reading(多読): 原書をひとり2冊ずつ購入し、2週間おきに次の生徒に回す。  
1年間で80冊の原書を読む。

第3回英検の全員受験を通してのデータの共有

### 成果①



### 成果②

共有した指導の成果として、自分の意見を多く述べようとする姿勢や異文化への興味関心を伸長することができた。(教員)  
ホストファミリーになって自分の子供の英語コミュニケーション力に驚いた。(保護者)

### 今後の課題・方向性

普通科のCan Do List改善が予定通りには進んでいないのが現状であるが、今後引き続き取り組んでいきたい。国際教養科のCan Do List改善に着手したい。また、Can Do Listの運用については、普段の授業に落とし込むことと、教師だけでなく生徒にもCan Do Statementに注意を向けさせる仕組みも考えたい。  
Fluencyを伸ばすと同時にAccuracyも伸ばしていくことに課題が残っている。Can Do List作成の話し合いを通して、考えていきたい。

### 現状の課題と課題解決のための手立て

- ・3学年を通じた学校としての目標設定及び総体的な英語指導力の向上。
- ・各種英語研修会、公開授業及び研究協議等で得た学びを英語科全体で共有し、上記を目指す。

### 具体の取組の内容

- 1 中央研修に参加した英語教育推進リーダーを中心とする、各科目の指導法協議（最低週1回実施）  
－同科目を担当する教員間での目標設定の共有、及び言語活動を中心とした指導法の統一
- 2 公開授業、及び研究協議会の実施（年2回）  
－6月に県内小・中・高の先生方を対象にした公開授業及び研究協議会を実施、第2回は31年1月に実施予定
- 3 英語科校内研修会開催（年に2回の定期研修及び科会での議論）  
－学年間での目標設定、指導法、及び評価方法の共有

### 成果①

生徒の授業アンケートより  
問 授業中、自分の意見や考え方を発表する場面がある  
回答 「はい」79.0% (前年69.5%), 「どちらかと言えばはい」17.0%(前年26.2%)  
⇒授業中に生徒が自らの考えを発表する機会を充実させることができた。

英検取得生徒数の推移 (人)

	英検2級	英検準1級	英検1級
2014	84	6	0
2015	106	7	0
2016	160	8	3
2017	181	10	1

### 成果②

上記1, 2, 3による授業改善により、  
①積極的に自らの意見を発表する生徒が増え、授業内の言語活動が更に活発になった。  
②教員間の共通認識をもつことができ、学校としての指導力が向上した。  
例)・帯活動としての warm up活動の共有  
・パフォーマンステストの運営及び評価基準の共有等

### 今後の課題・方向性

- 1 成果の検証  
生徒の英語運用能力への具体的な影響(どんな力が、何に対して、どれくらいなど)に関しては、さらなる検証及び分析が必要。
- 2 研究開発  
より高度で、より現実的な言語運用能力を育成するための新しい言語活動を研究開発する必要がある(=思考力・判断力・表現力を育む言語活動)。  
また、Can-Doリストの形式による3学年を通じた目標設定の見直しを図る必要がある。